

ジョン・モリッシーほか三名著

(上杉和央監訳阿部美香ほか三名訳)

『近現代の空間を読み解く』

本書は歴史地理学の教科書としてSage社から刊行された *Key Concepts in Historical Geography* (二〇一四) の邦訳である。本書の標榜する「批判歴史地理学」とは、地理・歴史の知識が生産される過程で妥当とされてきた主張を批判的に検討し、歴史地理学の文脈において捉え直す地理学的実践を指す。この視座に立脚して、過去の多様性のみならず、現代の空間や地理・歴史的事象の理解を豊かにすることが目指されている。

近現代に特化した研究が盛んに行われている英語圏歴史地理学の特徴は、政治・社会・文化地理学と強い関連性を持つに至ったことであろう。本書は八つのセクションから構成され、各三章ずつ全二十四章にわたってモダニティの空間性を読み解くための鍵概念をめぐる議論が展開される。

「I コロナリアル／ポストコロナリアルな地理」では、帝国主義・(反)植民地主義

の相互補完・依存関係が探求される。さらにコロナリアルな文脈下の開発を正当化する歴史的な経緯の批判的検討においてもみられるのが、批判歴史地理学に共通する「過去を認識することで現代をコンテクスト化する」という視点であった。

「II 国家／民族建設と地政学」では、領域・アイデンティティ・心象地理の検討を通じて、多様性を覆い隠す表象、民族紛争や対テロ戦争に結びつく情動的な心象地理が鋭く批判されることになる。

「III 歴史的ヒエラルキー」では、近年の文化・社会地理学の重要な概念である階級・人種・ジェンダーを取り上げ、歴史地理学において、差別が正当化された歴史をいかにして理解し、どのように取り組むべきかが示されている。

「IV 建造環境」では、自然を社会的に構築された、いわば「第二の自然」として理解することの重要性が示される。また、日本ではあまり馴染みのないM・R・Gコンツェンによる都市形態学的手法に着目している点も興味深い。

「V 場所と意味」では、文化論的転回の帰結を踏まえて、遺産(ヘリテッジ)を

めぐる文化的かつ政治的な対立や複雑な役割が捉えられる。さらにパレードのようなスペクトルをめぐる視覚性とその政治性、公共空間に付与される意味とアイデンティティの関係なども議論される。

「VI モダニティと近代化」では、資本制下の多面的な社会変化を空間化して捉える必要性和同時に、これまで地理と切り離されてきた科学と特定空間との密接な関係性が指摘される。また歴史地理学におけるモダニティ概念の再定位が試みられている。

「VII 境界を越えて」では、グローバルイズムを支えている規範的主張を批判することの重要性が強調される。一方でM・フーコーの統治性の概念が解説され、N・スミスの「自然の歴史化」という視点に着目し、物質的世界の変化を捉えた議論も行われる。

「VIII 歴史地理学的知の生産」では、学史の整理、視覚資料の活用之際して批判的な視点を持つ重要性が述べられる。最後に内省すべき方法論的側面をフィールド・資料・解釈・語りの視点から考察している。

既存の諸概念が歴史地理学の文脈において刷新されるなかで、日本の歴史地理学は何を学び、いかなる貢献を果たすべきなの

だろうか。新しい知の生産に向けて思案するきっかけと知的刺激を与えてくれる本書を思考訓練の教科書として、地理・歴史的な事象に関心を持つ読者にお薦めしたい。

（菊判 二六八頁 二〇一七年四月

古今書院 税別三二〇〇円）

（前田一馬

立命館大学大学院文学研究科博士後期課程）